

2024年 第175号 最終号

前・多摩市議会議員

岩永ひさか Report

<http://www.iwanaga-hisaka.net/>

発行/岩永ひさかと夢・まち会議 Phone (留守番電話専用) / 042-371-0763



フェアな政治を
つくりたい!



22年間、ありがとうございました。岩永ひさか市議会レポート「ほうれんそう」は今号をもちまして、終刊いたします。

Policy & Style

公平公正な姿勢!
市民全体に向けた活動を心がけ、
個人後援会は作りません。

政策づくりが議員の仕事!
議員としての専門性を磨き、市民の自治力の
向上をバックアップします。

話し合いが大切!
意見の違いは粘り強く議論をつづけること
で、「第3の道」を見つける努力をします。

PROFILE

1977年 兵庫県神戸市生まれ 1989年 北諏訪小学校卒
1995年 桐朋女子中高(普通科)卒 1999年 中央大学法学部政治学科卒
2006年 明治大学大学院ガバナンス研究科修了
大学卒業後金融機関(旧中小企業金融公庫)に3年間勤務したのち、
2002年4月 多摩市議会議員補欠選挙にて当選して以後、6回当選。
2024年6月 東京都議会議員補欠選挙に出馬のため自動失職
諏訪2丁目在住 家族/娘20歳



Phone & Fax

☎: 042-371-0763

いたずら、迷惑電話が多く、留守番電話専用です。

お返事が必要な場合には、お名前、ご用件と希望する連絡先等を残していただければ幸いです。

mail: hisaka_box@yahoo.co.jp

22年間ありがとうございました!

急遽実施が決まった都議会議員の補欠選挙。その後の活動を見据えて、立憲民主党の公認を得て、立候補しました。結果は、力及ばず残念に終わりましたが、都政を「変えたい」「変えてほしい」という市民の皆さんの想いや声を受け止めることができ、私にとっては励みとなりました。応援して下さったみなさまには心から感謝し、そしてお詫び申し上げます。

25歳で市議会議員補欠選挙に立候補した時から、「市民の力で動かす政治をつくる」をめざし、自分自身も実践者の一人になりたいと活動を重ねてきたつもりです。今回の選挙を通じて、「待っているばかりでは変わらない」「やっぱり、私たちが動かないと!」と呼びかけ、政治を変えていくのは「ひとり一人」の私たちであることを訴えてきました。

今回は都知事選挙とともに、投票率が60%を超えたことが私にとって何よりもうれしいことでした。また、「一人スタンディング」が広がり、投票を呼び掛ける市民、特に若い世代の皆さんが、一人また一人と増えていったことは、今までにはないムーブメントであり、その変化の兆しに大きな希望を感じることもできました。

みなさんの期待に応え、思うような結果は出せなかったとはいえ、多摩市だけでなく稲城市のみなさんにもお会いすることができたこと、そして、多摩市議会と稲城市議会の有志、総勢15名の市議の皆さんと一緒に選挙活動に取り組めたことはひとつの成果だと捉えています。政党や会派の壁を乗り越えて「違いは力」をみんなで共有できた時間こそ宝です。求められている地方議会のあるべき姿を垣間見た思いです。やはり、多様な価値観を認め合い、お互いを尊重できる社会が、「子どもたちの未来」に実り多い新しい道筋を拓いていくと考えます。今まで本当にありがとうございました。



これからも共に。私はずっとここにいます。
あなたの声を聴かせてください!

2024年7月吉日

岩永ひさか

もっと「対話」しよう。私たちも参加して。 ～聴く力・表現力・思考力を育む対話～

私がこれまでの活動を通して、大切にしてきたのは「対話」です。「政治は生活」だからこそ、無関心であっても、誰一人として無関係に生きている人はいない。だからこそ、疑問の声をあげることは大事、「これっておかしくないかな？」を問題提起することも大事。意見の違いを互いに認め合いながら、解決策を講じていく…ここにこそ「政治」の果たすべき機能がある。

「対話のできる学校づくり」を。

6月議会の一般質問が私の市議会議員としての最後の質問となりました。取り上げたのは、「未来をつくる学校」を考えるための「対話のできる学校づくり」でした。

質問のきっかけは、市内中学校における部活廃止問題です。新年度に入り、急遽、市内の中学校で、唐突に部活の廃部が知らされ、子どもや保護者、地域に不安、混乱、憤りが広がったこと。

多摩市には「子ども・若者の権利を保障し支援と活躍を推進する条例」があり、「子どもの声を聴く」が重視されているにもかかわらず、「子どもの気持ち」を置き去りにしたかたちで、大人（学校）の都合が優先されたことに対し、暗澹たる気持ちとなったからです。

今、学校はブラックと言われる教職員の働き方改革の中で、中学校の部活動についても、地域移行を進める方針が示され、多摩市でも取り組んでいかねばなりません。

その際、子どもや保護者の声をすべて受け入れることができない場合もあるでしょう。

だから「対話」が必要なのです。

今回、質問のきっかけとなった市内中学校では、保護者をはじめとする地域の皆さんの熱意ある働きかけにより、最終的には「改めて協議をしていきましょう」と学校の方針が一旦は取り下げられることとなり、安堵しました。

しかし、この件に限らず、学校を取り巻く環境もまたひと昔前とは様変わりしており、「開かれた学校」をつくっていくことへの課題は大きいのが現実です。

今、地域や保護者の抱える実情に向き合う必要。

多摩市では全小中学校が地域と協働で学校づくりを進める「コミュニティスクール」になっています。しかし、その実情は「担い手」をどうしていくか焦眉の課題になっており、例えば、各学校の「PTA活動」そのものも活動の継続が困難になっている状況もあります。保護者や地域との関係性をいかに育むか、言うほどに簡単ではないのです。

今や保護者の共働きも当たり前の時代となり、PTA活動に対する負担感も大きくなり、「今までの当たり前」を見直していかねばならない状況です。

だからこそ、やっぱり「対話」なのだと思います。子どもたちのためのよりよい学校環境を整えるには、保護者や地域の皆さんとどうしていくべきなのか、「PTA」の在り方についても、学校ごとに今後の方向を見定めていくことが求められます。そして、それについて、どのような場で議論していくのか。ここに大きく関わるのが「学校長」の在りように他なりません。

学校の全ては「学校長次第で変わる」とも言われるように、トップマネジメントだけでなく、「対話力」がますます問われていく時代です。

例えば、昨年暮れに話題になった全国の小学校にプレゼントされた「大谷選手のグローブ」についても、学校長の考え方で「使わせない」と長期間にわたり、多摩市内でも頑なに拒否をされていたケースもありました。

それについて、市教委から助言がなされたとしても、学校長の固い意見が揺るがなければ、変わらなければ、それまで。つまり、学校長の見解や方針はそのくらい重たく、責任のあるものなのです。学校経営を任せる市教委も最終的には「学校長」を最大限尊重します。

「未来をつくる学校」 するための対話力を磨こう！

今、学校が置かれている状況は本当に厳しい。特に教職員のなり手不足も年々深刻化しています。また、予防策を講じても増え続ける不登校の子どもたちの存在、働きすぎてストレスによる過労でつぶれてしまう教職員たち…忙しすぎて子どもたちにゆっくり向き合えず、気持ちはあっても学校への協力がなかなか叶わない保護者のみなさん…改めて今、問われるのは私たちの暮らしや社会の在りようを見つめ直すことかもしれません。

そのためにも、要求や要望を一方的にぶつけあうのではなく、「対話」で問題解決を図ること。

この重要性を認識することが必要不可欠だと思います。今こそ、「学校長」を始めとする教職員の「対話力」のスキルを磨く研修、あるいは、必要な場づくりの工夫を市教委が率先していくべきではないかと考えています。

そして、多くの保護者が「モニターペアレント」と思われたくないから…と意見があっても、ぐっと堪えるではなく、疑問に思ったことをもっと気張らずに学校に伝えていけるような「風通しの良さ」が多摩市内全小中学校で広がりますように。これからもずっとずっと…願ってやみません。

今までありがとう
ございました。

